

①ロバート・オーウェンの思想を語る前に、彼の生い立ちを見る。

彼は北ウェールズの貧しい家庭に生まれ、10歳から住込み店員として朝早くから夜遅くまで働き、そこで商売の方法や商品の扱い方を身に着けた。18歳のとき、共同で紡績機械の製造工場の経営をする。二年後にはマンチェスターで小工場の経営者になり、翌年21歳のとき、大紡績工場の支配人に応募し登用された。そこで機械の改良・改善に努め、世界初の細糸紡績に成功し、繊維業界の神童としてマンチェスターの名士となる。

オーウェンの成功のカギは、彼独自の生産管理と労務管理であった。当時の工場労働者は怠惰、不道德、労働意欲のない人間が多く、1798年にニューラナーク紡績工場を買い取り彼独自の経営をする。自分の工場で、理想を実現するため、労働者の乱れた生活を労務管理と環境改善で変えようとした。具体的な方針として、少年工に対するむち打ちの罰を廃止、児童工の雇用を禁止、一日12時間労働、工場パトロール、従業員住宅の改善、直営の小売店で良品を販売するなど試みた。また、ナポレオン戦争で繊維業界が不況の時にでも1人も解雇せず機械の整備にあたらせた。従業員の教育が重要であるとして、性格形成学院を設立した。福利厚生では疾病共済基金制度を設立し、健康保険制度の基を試みた。彼は、「人間の性格は環境により形成される」「あらゆる非行は本人の責任ではなく、環境の責任である」という理論を持ち、自身の工場で実験した結果に自信を持った。

1825年、ニューラナークを売り払い、アメリカに共同社会理想郷（ニュー・ハーモニー平等村）を作り、その目的は、古い利己的な個人主義による制度の害をなくすことであった。しかし集まった者は現実社会からの脱落者であり、2年間で失敗することになる。

彼は、競争システムや工業化社会による非人間化が進むと、人間性を失った社会になることを心配し、人間的、魅力的な解決策を提示して、実践していった。「環境が変われば地球上に本当の天国を築くことができる」と確信していた。

オーウェンの業績として後世に大きな遺産として残したものは、ニューラナークにおける経営理念、幼稚園教育、工場法の改正、協同組合運動、労働運動、生存権の共同体補償などがある。

②産業革命により家内工業から工場生産に移るにつれて、そこで働く労働者にとって過酷な条件になっていった。そこで産業資本家と労働者との間に労働問題が発生し、人道主義的な人々により児童及び女子労働者の保護を目的に工場法の制定運動がおこった。1802年の工場法案は主に教区徒弟のみを対象としたものであったが労働者保護立法という点では近代工業社会における社会政策の基となるもので大きな意義がある。ロバート・オーウェンは独自の労働管理で雇用条件や福利厚生の上を目指して工場法の改正に挑んだ。しかし彼の改正案は一般の工場経営者にはあまりにも大胆すぎると映り、反対する者が多かった。1819年の改正では、国の責任のもと、9歳未満の児童の雇用禁止や9～15歳の年少者の労働時間を1日12時間に制限することが決まり、また年少者全般を対象にしたものであ

った。しかし工場の査察制度の不備のため実効性に乏しかった。

③1824年の団結禁止法の撤廃により各地で職種ごとに労働組合が結成された。この労働組合は政治的なものではなく資本家との交渉にすぎなかった。また組合員同士で支えあう共済の役割でしかなかった。強い交渉力の労働組合を求めて、全国的なものにしたのが、1829年全英紡績職工総同盟で、全国の労働者階級を1つの組織にまとめるものであった。この試みは組織運営上の困難により解体したが、後の運動に大きな影響を残した。

その後、ロバート・オーウェンにより1834年に全国労働組合大連合（グランド・ナショナル）が結成された。この運動の目的は、平和な手段と説得により理想の共同社会を実現することにあった。参加した組合のリーダー達は急進的な立場で、オーウェン主義と異なり結束が崩れ1年もたたずに解体した。

しかし、短期間のうちに初めての大規模な組合運動が展開され、労働者階級の力が支配者階級に対抗する大勢力に成り得ることが認められた。オーウェンによる大連合の展開が後に続く運動に大きな影響を与えることになる。オーウェンの階級調和的楽観論は、当時の知識人であるリーダーに信用されなかったことが運動の限界であった。

結論：オーウェンは空想的社会主義者と呼ばれたが、産業革命を通して資本主義の矛盾に対抗していった人道思想家でもあった。彼の思想は人間主義であり現代社会の先端をゆくものであったが、当時の指導者階級は彼の理念を理解することができなかった。 (A)